『続日本王代一覧』の研究

藤原　暹

はじめに

林羅山（1583～1657）は正保年間に幕命を受けて，『本朝通鑑』の編纂にとりかかった。この事業は羅山が正編を編述したところで没したため，彼の子，林鵞峰（1618～1680）が主宰して，前編，続編を加えて，寛文10年（1670）に合せて3編310巻を完成させた。

この大事業が行われている間に，鵞峰は慶安5年（1652）に若狭国主従四品左少将源忠勝（大老酒井忠勝）の求に応じて，「国史小説等ヲ考ヘ其繁ヲ刪リ其要ヲ掲ゲ新ニ之ヲ撰シ」（跋文）て『日本王代一覧』全七巻を撰修した。

かくして『日本王代一覧』は寛文3年（1663）に上梓後，寛政7年（1795）享和2年（1802）に重刊された。この書は巻之一神武天皇から巻之七正親町天皇に至る106代に亘る歴史事跡を和文体編年史になしたもので，終りは慶長5年（1600）関ケ原合戦により「天下コトコク家康公ニ帰服」した事をもって筆を止めている。平易な編年史であったことがかえって内外の研究者の目をひき，特にケンペル（Engelbert Kaempfer）は『日本誌』に引用し，ティチング（Isaac Titsingh）は蘭訳本をつくり，ついで英訳，仏訳をも志したのである[1)]。

ところで，この『日本王代一覧』の記述の後を受けつぎ107代後陽成天皇以後の歴史を記述しようという意図でなされた『続日本王代一覧』という書がある。興味深いのはこの『続日本王代一覧』という書が2人の異った人物つまり，国学者佐野郷成と蘭学者片山松斎の手によってそれぞれ別個になされ，各々その学問的性格や時代的性格によって記述内容が大きく異っている点である。

この点に関して，従来この面の代表的な研究書である小沢栄一博士の『近世史学思想史研究[2)]』では次の如く述べられている。

> 常陽水府下の佐野郷成の宝永6年（1709）の撰という『続日本王代一覧上下2巻の写本‥‥これは（内容が）極めて簡略なもので別段何も言う事はない。‥‥（中略）次に，東都の片山円然の編集という文化元年（1804）5月の『続日本王代一覧』12巻がある。‥‥内容については格別のこともない。（187～188頁　‥‥部分筆者補）

はたして，小沢博士の言われる如くこの書の内容には格別の問題点はないのであろうか。

1）小沢栄一著『近世史学思想史研究』196頁，吉川弘文館，昭49
2）前掲著「近世史学の形成と林鵞峰」

1. 『続日本王代一覧』の2人の著者

林鵞峰の『日本王代一覧』の後を継いで，はじめて『続日本王代一覧』を執筆したのは佐野郷成(さとなり)(1653～1720)である。彼の経歴はあまり明確にはわからない。諱を郷成，通称を清六，後に甚衛門と改めた。元禄11年(1698)45歳の年に水戸彰考館に入り，『大日本史』編纂事業に参加した。通常，徳川中期の国学者とされ，著書に『新補水城実録』11巻，『三河先世事蹟抄』13巻，『御系図大全』6巻，『塵土抄』10巻等がある。

現在，内閣文庫が所蔵する写本『続日本王代一覧』には「常陽水戸府下佐野郷成撰」とあり，彼が水戸在住時代になした著述である事が明らかになる。内閣文庫本は上，下2巻に分れ，上巻が第107代後陽成院から第108代後水尾院まで37枚，下巻が第109代明正院から第114代今上皇帝（中御門院）の宝永6年(1709)6月21日受禅の記事まで32枚から成っている。この写本には叙も跋もなく，執筆年代を知ることはできないが，宝永6年の記事があり，彼の死が享保5年(1720)である事から晩年10年間の執筆であったと考えられる。

片山円然という人に関しては蘭学者で地動説の流布者として，該当する研究史上時折名前が紹介されてきた[3]。筆者はかねてより彼の経歴調査を行ってきたが判明した事項は次の如くである。

名を国倀(くにながし)，通称松斎，号を観月亭と称し，三河以来の旗本，片山家の子孫国雄の子として明和5年(1768)に江戸に生れた。天明6年(1786)19歳で小十人組に列していた父国雄の後を継いだ。『寛政重修諸家譜』によると，武蔵国埼玉郡に采地100石，稟米250俵を賜っていた。しかし幕臣時代は小普譜入り，つまり無役の身をかこっていたらしく特記すべき活動は見受けられない。ところが50歳前後になって有名な蘭学者司馬江漢(1738～1818)との交友の機会を得て急速に江漢の学問的影響を受け，その著述活動が活発化した。(拙論「片山松斎の研究序説[4]」参照)

彼の著述はほとんど，彼自ら記した「観月亭著書目録」(『蒼海一滴集』続二巻末)に纒められている。

次頁目録中にある「文化丁丑」とは文化14年(1817)に当るから，これらの書は松斎の50歳前後（司馬江漢の最晩年）に刊行されたり，されようとしていた事がわかる。

この目録中の大部分の書は現在東北大学附属図書館狩野文庫に所蔵されているが，この目録以外にも同文庫には『天学略名目羽翼』1巻（天保6年）があり，また九州大学附属

3) 片山松斎（円然）の名はかなり早くから注目されている。昭和5年に出版された『天地理譚』で村岡典嗣氏が司馬江漢の知己として紹介されたのに続いて，阿部真琴氏「江戸時代に於ける地球円体・地動説」『唯物論研究』昭8，No.3及び海老沢有道著『南蛮学統の研究』昭33，創文社等が発表された。

4) 『科学史研究』No.76，岩波書店，1965

観月亭著書目録
○続日本王代一覧　六巻
自天正十五年至享和三年記　国家治乱興廃　天変地妖等事実
○続日本王代一覧後記　二巻
自文化元年以後記毎歳事実
○続歴代筌宰録
自大明崇禎十七年至清嘉慶初年記支那治乱興廃事実
○続唐土王代一覧号清史纂要　壱巻嗣出
記清朝歴代帝王事実
○天学略名目　壱巻
記倭漢西洋天文地理大意
○天文俗解　二巻
記西洋新奇天文地動説大意
○蒼海一滴集　五巻
記見聞覚知諸説
○続蒼海一滴集　二巻
同脱漏一巻　同拾遺一巻
如　上
文化丁丑春下瀚　松斎散人誌

図書館には『地転窮理論』1巻（文政10年）が蔵されている。なお彼の随筆『北窓雑話』2巻（文政9年）が『百家随筆』（国書刊行会版）に収められている事はつとに知られている所である。

さて前掲著書目録にも記されていたが，『続日本王代一覧』は文化元年（1804）に執筆された。松斎の著述の中では最も早くなされたもので，いわば50歳前後を機にその思想が大きく拡大する前提をなすものであったと考えられる。

2. 『続日本王代一覧』の執筆動機と状況

佐野郷成の『続日本王代一覧』には序も跋もなく執筆動機について確かな事はわからないが，鵞峰の記述が106代正親町天皇で終っている後を継いで107代後陽成天皇から直ちに書きおこしているから郷成は鵞峰の執筆意図をそのまま受けつぎ，その続編を成そうとしたことが推察される。

松斎の方には叙があり，そこで彼は，

日本王代一覧者林春斎法眠応若狭国主酒井左少将忠勝之求而所編集也　自神武天皇至正親町院天正十四年共七貼也　予雖不敏効古先之瞶考国史及雑録小説等刪其繁乱其要領而訂稽輯録　自後陽成院天正丁亥至今上皇帝享和三年癸亥共十巻　名曰続日本王代一覧　以授童蒙読小史者庶乎後世好古之学士相続述記之則余幸甚云爾

と記している。

この叙からまず松斎は林春斎（鵞峰）のそれの後を受継いで執筆しようとした事がわかる。更にこの点では佐野郷成と同じであったが，自ら執筆する書を「童蒙ニ授ケル」意図

を有していた。つまり啓蒙的意識をこの書の執筆に込めていたのである。次に松斎は「後世好学之士」が自分の意図を更に継続することを望んでいる。この事は自らが執筆する（した）部分も含んで日本歴史小史の以後の完成に期待したという事になる。つまり，智識（学問，研究）の継続，積み重ねが価値ある目的とされているのである。

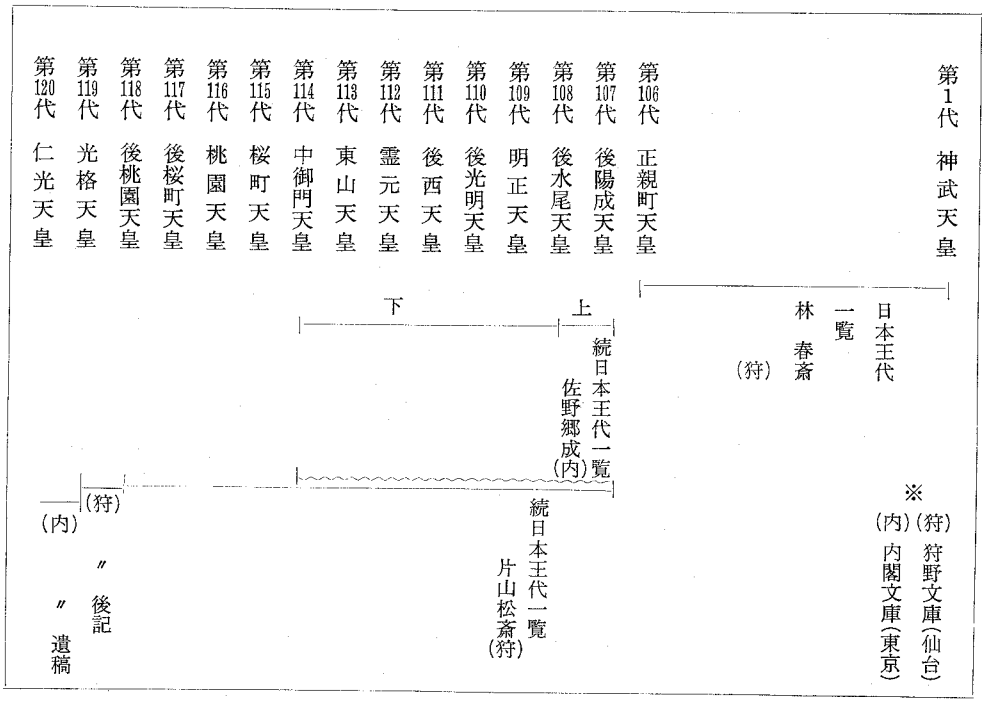
ところで彼は，後世好学の士に托したその『続日本王代一覧』以後，彼の存命中の記述を更に『続日本王代一覧後記』として文化3年迄を記した。『続日本王代一覧後記』は東北大学附属図書館狩野文庫と内閣文庫に写本が現存している。その『後記』の序には，

> 今又文化元甲子年ヨリ以後の事実年々是ヲ輯録シ名テ続日本王代一覧後記ト号ス　庶乎ハ我没後ニ及テモ同志の君子読記シテ後際ヲ尽シ永ク断絶セシムコトナカレ。

と述べられていて，彼自らが年々記述を重ねると共に更に後学に「同じ志」の継続を托した事がわかる。

この彼自らの努力は更にまた彼の死まで続けられていたことが次の事項で判明するのである。

東北大学所蔵本では『続日本王代一覧後記』巻1，巻2のうち「巻2」をもって「止ム」とある。しかし，内閣文庫本には「自文化元年至文政12年全」と記され，しかも「続（日本）王代一覧後集　葱圃損益録　片山円然遺稿』とある（……部補）。この書は前半が「文化」後半が「文政」となっており，特に文政年間の記述は文政12年（丑年）12月晦日まである。してみると，『続日本王代一覧』は松斎自身の手によって東北大学蔵本の文政元



年以後も書き継がれ，文政12年の年末をもって松斎の記述は終ったことがわかるのである。

以上述べきたった『続日本王代一覧』同『後記』同『後集遺稿』の執筆状況を略表示すると左下の如くになる。

3. 両書の内容

前節でも述べた如く，佐野郷成の書は第107代後陽成天皇より第114代中御門天皇に至る8代，約120年間の記述に終っている。240年間にわたる記述を有する片山松斎のそれと全てに亘って内容の比較検討を行う事はここではできない。

そこで両書の重なる部分，つまり後陽成院から中御門院までの時期で，歴史事項としては文禄慶長の戦を通して徳川家康の征覇が成り，やがて幕藩体制の確立，封建文化の開花としての元禄期までの間を比較の対象としてみたい。

まず両書の体裁であるが，『国書解題』の評言によると，「『続日本王代一覧』2巻佐野郷成……体裁全く片山圓然の『続日本王代一覧』と異ることなし」とあり，前掲小沢博士の『近世史学思想史研究』では「体裁などみな（佐野の書も片山の書も）『日本王代一覧』を襲うている」とその体裁を同一を指摘している[5)]。

しかし，体裁から明確に異るのである。佐野の書（以後略記する）では，歴史記述を林鵞峰のそれの如く天皇の王代でもって区分している。これに対して片山の書では，天皇の王代と共に大将の御代を併記して区分している。この事は単なる形式上の問題にとどまらないで，実は記述内容自体にも関係している。

佐野の書では天皇の皇位継承記事が詳しいのに対して，片山の書では将軍の歴略が之に代っている。

例えば，佐野の書で107代は，

後陽成院　諱ハ政仁　周仁ト改　正親町院ノ御孫故東宮誠仁親王ノ御子也　御母親王東院藤原秀子勧修寺内大臣晴秀ノ女ナリ　元亀二年辛未十二月十五日生ル天正十二年甲申正月十五日親王トナリ十四年丙戌九月二十日元服　加冠関白秀吉理髪藤原充房十一月七日受禅時ニ年十六二十五日即位正親町上皇ヲ院御所ト称ス　関白ハ内大臣秀吉ナリ天下ノ叉大小トナク豊臣秀吉執リ行ハル

という記述である。片山の書では文中一線を施した部分のみである。また逆に片山の書では，2代将軍秀忠の記述が，

秀忠公ハ家康公ノ御三男ニテ御幼名長麿君ト申シ奉ル　天正七年己卯四月七日遠州屋敷智郡浜松城ニ於テ御誕生御母ハ宝台院殿ト号シ西郷弾正左衛門清貞ノ娘ナリ　御治世十九年ニシテ家光公ニ譲リ給フ　本多上野介正純成瀬隼人正正成安藤帯刀先生直正老中タリ　十年己巳二月大将軍安康公御上洛伏見ニ入御三月二十一日秀忠公御上洛榊原康改前駈タリ　東州ノ列侯皆従ヒ奉ル　惣勢十万余人ニ及ヒ其行粧善美ヲ尽セリ　伏見城ニ入御アリ‥‥(中略)‥‥四月家康公奏聞シテ征夷大将軍職ヲ秀忠公ニ

5) 前掲小沢著，188頁

譲ン事ヲ請ヒ給フ　同十六日秀忠公内大臣ニ任シ　征夷大将軍ニ補セラレ‥‥(以下六行略ス)

と詳述されている。これに対して，佐野の書には，

十年乙巳二月将軍家伏見ノ城ニ入ル　三月右大将家入洛‥‥四月十六日家康公将軍ヲ秀忠公ニ譲リ大御所ト称ス。

とあるにすぎない。こうした記述の相違は一方が京都朝廷中心の記録で一方が江戸幕府将軍中心のそれを事実史として表現した事によるが，こうした各々の記述のポイントの差は更に，各々一方は朝廷を一方は幕府を擁護する傾向を示すようになってくる。

佐野は天皇即位の記事に附して，例えば109代明正院の部分で，

御水尾院ニ太上天皇ノ尊号ヲ奉リ　院ノ御所ニテ政務ヲ沙汰セラル　然レドモ何事モ関東ヨリ計フ。

と記し，104代今上皇帝の部分では，

父仙洞　政務ヲ聞食ス　然レドモ何事モ関東ヨリノ計ヒ也

と言って暗に朝廷の内事に幕府が介入する事について不満を表わしている。このことは元和6年の徳川家光の元服について，

正月十一日秀忠公嫡男家光元服　諱定メ震筆ヲ深メラル二條大納言康通是ヲ伝信セラル　室町家将軍以来ノ嘉例ナリ

と記している事にも通じるものであろう。勿論，片山の書にはこうした記述はない。

以上の両書の相違は，佐野が水戸彰考館で『大日本史』の編纂事業に携っていた人物としての立場と，片山が下級幕臣とはいえ三河以来の旗本であった立場の相違に因ると考えられるが，しかし両書の相違はこれだけで説明し得ぬ内容をも示している。

例えば，社会現象や自然現象に関しての記事が大きく異っている。社会現象について見ると，片山の書は彼の家格であった小普譜組や小十人組の記述がかなり多く見受けられるが，こうした身辺の記述を除外しても，人事賞罰，文化，宗教等の記述が詳しいのである。

例えば，寛永9年9月5日の記事に，

駿河忠長卿　甲府ニ御蟄居アリ　是ハ忠長卿近年御狂乱ニテ　従臣多ク切害シ給フカ故ナリ

とある。この忠長郷に関しては前年11月5日の記事に，

駿河忠長卿浅間山ニ獵シ　猿千二百四十余疋ヲ得給ヘリ　御帰館後ヨリ甚タ御短気ニナラセラレ自ラ従臣ヲ殺害シ給フ事　数輩ナリ　是浅間ノ神ノ祟ニヤト言伝フ。

とあるのを受けての記述である。そして，更に忠長に関しては，9年10月11日の条で，

駿河大納言忠長卿御逆意ニ依テ　甲駿遠三州ノ御領没収セラレ上州高崎城主安藤右京亮重長ニ預ケラル　家老朝倉筑後守ハ和州郡山ニ配流ス　同奥津河内守ハ奥州由利ニ配流セラル　駿府ハ御番城トナル。

とあり，更に10年9月12日には

阿部対馬守上使トシテ　将軍家ノ御直筆ヲ以テ　上州高崎ニ到リ　安藤右京亮重長ニ対シ上意ノ旨ヲ宣ヘ忠長卿ニ御生害ヲ勧ム十一月六日駿河大納言忠長卿高崎ニ於テ御自殺春秋二十六ナリ　同国大道寺ニ葬リ峰厳寺殿ト号ス。

と詳述されている。佐野の書には「故アリテ蟄居」とのみ記されている。この事は幕府内の風聞を興味を抱いて詳述したにすぎないとの評価もあり得るが，実は寛永20年9月の加藤式部大輔明成の奥州会津40万石没収の事件についても，元禄14年の浅野内匠頭長矩の事件についても同様の記述の方法をとっているので，片山は或る事件の記述に際して，その動機，経過，結果をかなり追求しようとする態度を有していたと見ることができるのである。

また，寛文3年に林鵞峰が『本朝編年録』の続編を命じたこと，同10年『本朝通鑑』が完成したこと，更に延宝6年5月に女院の御病院のため将軍家より「当麻ノ曼陀羅ヲ始テ錦繡ヲ以テ潤色」された品を遣わされたこと，慶長12年3月28日駿河で天海僧正が林道春と法論をたたかわせたこと等々の記事は佐野の書には一切見られないのである。

次に自然現象に関して考察してみたい。

佐野の書には自然現象つまり気象，星変，地震等についての記述は非常に少ない。例えば天和5年の彗星出現，慶長12年八丈島噴火，寛永8年の灰降る事，寛文4年彗星出現同9年天狗星出現等の若干の記事はあるが，自然現象を特別に注目していたとは考えられない。

これに対して片山の書は，彼らが，『続日本王代一覧　六巻自天正十五年至享和三年記国家治乱興廃天変地妖等事実』と記しているように「天変地妖」つまり自然現象への注目が，「国家治乱」という政治現象と併置され把握されているのである。

ちなみに，佐野の書と相重なる時期におけるこれらの記事を抽出して表示してみると右の如くになる。

自然現象	回数
地震	17
大水	14
大風	14
雷	4
大旱	3
雹	3
白気	3
黒雲	2
流星	2
大雪	2
月食，日食，異星，光物，天狗星，流星，天火，星変，津波，石降，灰降，砂降，乾風，甘露各1回	
総計	77回

この表示した部分は片山の書の巻1から巻5まで145丁分である。その間に77回の記事がある訳であるから，2丁に1回の割合で何等かの自然現象記録があることになる。しかもこれに加えるに，大風に伴う火事の記録も多く，天災に加わる人災の記述量はとうてい佐野の書には比較にならない比率を示しているのである。

ではこのように，自然現象，就中災異の記述において片山の書が著しくその特色を示している事は如何に考えるべきであろうか。次にその思想史的意味を考察してみたい。

4. 松斎『続日本王代一覧』の思想史的意味

松斎の『続日本王代一覧』の特色の一つとして災異の記録性が存在した意味については，まず松斎自体の生活意識の側面と，いま一つには時代的な外面的な影響の側面が考えられる。

下級武士として松斎が抱いた関心には，例えば同じく軽輩として自らの生活の困窮の下にいや応なしに影響を与える「火事」「地震」「風水害」等の「天変地異あいつづく」状況を克明に記述した朝日重章の『鸚鵡籠中記』(元禄4年～享保2年[6]) にも似たものが存在したであろうことは想像に難くない。しかしここでは佐野郷成が宝永6年から享保5年までに執筆した時期以後8，90年を経て執筆した松斎の時代的外面的な状況の側面で考えてみたい。

佐野の書と松斎の執筆の間に，思想史上には実に重要な展開が見られた。つまり，享保の護園学の成立，国学の隆盛，蘭学の勃興という大きな動きであった。

就中，江戸蘭学の勃興は安永3年 (1774) に完成した『解体新書』の出版をもって実証的精神を当時の知識人になげかけた。この風潮から知識人達は自分達をとりまく自然現象社会現象等に深く関心を抱くと共に，そうした現象への大胆な批評をも示すに至った[7]。

特に『解体新書』の訳述に携った杉田玄白 (1783～1818) は専門の医学に関する著述の他に，社会的，政治的問題への評論と目される『形影夜話』，『野叟独語』を執筆し，更に江戸の災異史を記録した『後見草(のちみぐさ)』を残した。

『後見草』については，早く森銑三氏が[8]，近く片桐一男氏が紹介[9]されているので詳しくはそれらに譲りたいが，問題はこの書の序文に見られる玄白の災異を中心にする歴史執筆の意識であり，また玄白の高弟として序文を寄せた大槻玄沢 (1758～1827) の賛同意見である。玄白は序で，

> ‥‥余　宝暦十年より今年天明七年に至るまで，見聞き侍りし天変地妖を私記せし二つの巻あり。明暦より下つかた宝暦に至るまでの事を記し置ける人もありぬべけれど，いまだその記を見ず。因って宗山が記と余が記を合して後見草といふ三つの巻となす。これ所謂，後見今亦猶見古といふ意にならひてこの書に名つけし‥‥[10]

「宗山が記」とは亀岡石見入道宗山の記した『明暦大火の記』であるが，玄白はそれを受けついで，あと2巻を宝暦10年より天明7年に至る11年間の江戸災異史として著したという。ここに玄白によって災異の実態を書き継いでいくという歴史意識が表示されている事がわかる。玄沢の序は更にこの意識を明確にする。

---

6) 加賀樹芝朗著『元禄下級武士の生活』雄山閣，昭45
7) 佐藤昌介著『洋学史研究序説』岩波書店，昭40
8) 「杉田玄白の後見草」『書物と江戸文化』所収大東出版社，昭16
9) 『杉田玄白』261頁以下，吉川弘文館，昭46
10) 前掲，森銑三著，242頁

今この書きつづけし後先を見て，また新たにその時々のこと思ひ出でて，再びその時に逢ひぬるがごとし。今のことを読み，後のこれを見ん人もさこそはあらめと思ふばかりなり。あはれ，これを読む人，大人の厚情を汲み，深く意をとどめ繰り返してよと巻の初めにことわりを書き添え侍りぬ。抑天災地妖は人意の外にして，止むことを得ざる所なれば，ただかかる不慮なることの出で来るは常なきものにて，これにあへる人世の安危も測り知るべからず。遠く省み悟り，移り行く浮草の風俗に流れ溺れず貴賤上下おのおのその分際を知り，年に豊熟あれば荒歉もあり，人世も盛なりと見ゆればまた衰ふることもありといふこと‥‥道理をゆめゆめ忘るることなかれと思ふぞかし[11]。

と玄白の災異史叙述の意味を人世に対する警告と教訓にあるとした。

ところで『後見草』は「人意の外にして，止むことを得ざる」という天災として災異を描くことに止まったのであろうか。一見して「人意の外」と見られる現象が社会的現象を惹起し，両者が深い関係にある事をも注視しているのである。

例えば，明和9年は世人迷惑（めいわく）の年と呼んだが，2月29日より西南の烈風下江戸は大火が起り，秋には風水害に諸国大凶作となった。こうした凶作に続いて，

疫癘天下に行はれ，就中東海道は甚しく死しける人も多し。‥‥棺屋の限り呼出し，時の奉行の問せ給ふは凡十九万計りと答申奉りしよし[12]。

という疫病という現象の発生を視る。更に，

惣て近年のならはしにて，上に訴訟ある時は士民必ず党を結び，狼藉を振舞ふ故，領主・地頭の勢ひは何となく衰へて下に権をとらるるに似たり。実に季世のありさま[13]

という一揆，打ちこわしの続発を関係づけて，「季世」という時代認識に至っているのである。

こうした「季世」観の中から松平定信を中心とする新体制の出現を歓迎しているのである。

予若かりし時より風化次第に乱れけり。此末如何なる世とや成なむと，又如何なる事や出来なんと五十年に余る老の身にも応ぜぬ事のみを日夜案し居りしに白河の大老職に挙られ給ひて後，わずか三月ばかりにして‥‥悪風忽ちに改り‥‥[14]

つまり，自然現象への注目は社会現象への注視，更には政治的批判と拡大して思考されているのである。

玄白と松斎とは交友関係はなかったようであるが，同様の意識は存在していた。『北窓雑話』の「米屋騒動事実」で松斎は天明3年信州浅間山の爆発沙降，同6年夏秋の霖雨大水，諸国凶作の実態を描きやがてこれが因で打こわしの激発に及ぶ「あたかも戦国の如」き世を叙述した後で，松平定信の治世に筆を進めている。

六月十九日には，白川大守松平定信朝臣，執政上座の命を奉て法度を審にし，佞臣を退け正人を進め，

11）前掲，森銑三著，245頁
12）前掲，片桐一男著，264頁
13）〃　264頁
14）〃　266頁

諸士の非心を警戒し，奢侈を禁じ，質素を行ひ，廃れたる文学を興し，絶たる武術を起して文明の政化を海内に施し玉へり。天下挙て天明の聖代と称す。実に此朝臣は慶長以来一人の良相なるべし[15]。

と玄白と同様の時代認識が表明されている。してみると，『続日本王代一覧』の和文編年史体の短い次のような叙述の行間にも同様の意識が働いていたと考えるべきであろう。

○延宝三年乙卯春　天下大飢饉死人道路ニ横ヘリ。
○天和二年二月　京洛飢饉死スル者道路ニ多シ。
○宝永四年十月四日未刻　東海道大地震大地破裂海浜洪波人民多死ス。
○同六年七月四日　京都及五畿内近国大風吹テ民家ヲ倒ス事夥シ。
○江戸中ノ貴賤毎夜悪星南方ニ出現スト称シ　之ヲ見ル者ハ死スト言テ大ニ恐レ　此災異ヲ除クト称シテ家毎ニ牡丹餅ヲ拵テ喰之　又其頃江戸中ノ巷説ニ蕎麦ヲ喰ヘハ死スト云テ家々に禁之。等々。

以上の玄白と松斎との意識上の類似は勿論佐野郷成には見られなかった。これは蘭学及び蘭学の影響を受けた知識人に特に強く発見される性格である。

因みに，本多利明（寛保3～文政3年。1743～1820）をとりあげてみる。彼の蘭学の学統は明確ではないが，前述した松斎の師司馬江漢は友人であり，また西洋地理学者であった山村才助（明和7～文化4年。1770～1807）には多大の影響を受けた。寛政10年(1798)の自序をもつ『西域物語』は「日本と支那と西域との事を有の儘に記した」ものであるが，その執筆意図は「其心してせざれば災又遁るべからず」という日本の「災」への警告と啓蒙にあった[16]。彼の受けとめた「災」の中で天明の大飢饉に関する記述を抄記すると次の如くである。

天明癸卯の夏，信州浅間山焼て周廻へ砂降て耕作不熟して，飢饉とならん勢ひありしに，猶四ケ年目丙午に当て，豆州の大島の火山焼て夏中曇天打続，七月中旬に至て関東より奥羽越信十二ケ国大雨屯，大洪水せり‥‥余其年十月，用事ありて奥州会津領を通りしに売買の食物払底高直也。土地の人往来するも稀にして空家のみ多し。原宿といふ所に行暮たれば，一宿せんと宿内の旅籠屋もあらんと方々尋廻りし内，(或大宅あり)‥‥老婆一人出て云しは安き御頼にはあれど食物夜具等更になし夫も合点あらば兎も角も‥‥家内の様子も伺んと勝手へ深く入て能見るに男女共見分難き疲れ果たる人六七人にて長炉の際に火にあたり居たり。‥‥或宿へ泊りたる時に妻女の物語を聞に，其宿内に邪見成女あり‥‥(当年二歳なる男子の)首押取て捻殺し骨をも残さず喰たりと云り。又或宿に泊りたる屋に猫ありたる村内の者来り，此方の猫を被下かしと云様にとらへて代料也とて銭七百文を出したるにより‥此窮民の顔色容体いはんかたなし‥‥奥羽両国の内計りにても癸卯より丙午に至るの四ケ年の内餓死の庶民凡二百万に及びたるべし[17]。

利明はこうした「庶民」の災厄を述べた後その災厄が天災でなく人災，就中政治に因る事を指摘する。

爰に一老人あり。或時問て曰吾子は天文・地理・渡海の道は御国に具足せざれば大飢饉にあひ，国民を失ふ憂ある故是非共に具足せざればならぬと云‥‥此時に臨んで国民の飢渇を救の策もあらんか[18]。

利明の言う「天文・地理・渡海の道」とは江漢においては「究理学」と呼ばれ，松斎も

15) 『百家随筆第三』国書刊行会所収本 400頁～405頁，大7
16) 『日本思想大系 44』所収本 88頁，岩波書店，1970
17) 〃 123頁以下
18) 〃 127頁

それを受け継いでいた[19]。してみると先に指摘した松斎の異常気象への関心や把握の方法が彼固有の原因による以外に当時の開明的知識人共通のものであったことが判明するのである。

さて松斎の『続日本王代一覧』執筆の意識や内容が蘭学的知識人共通のものであった事は，日本における歴史叙述そのものの歴史の中で如何なる意味を有するものであったか。江戸時代における歴史叙述を画期的に転回させた作業として明治開化期における「文明史観」が指摘されてきた。福沢諭吉の『文明論之概略』(明治8年 1875)，藤田茂吉の『文明東漸史』(明治17年)，田口卯吉の『日本開化小史』(明治10年～15年）等である。こうした歴史叙述において埋もれた蘭学者やその影響を受けた思想家の事跡は直接には記述されておらず，勿論利明や江漢更には松斎などふり返られていない。しかしいわゆる「文明史観」で提示された歴史叙述の対象と方法は記述されなかった思想家と無縁ではない。

つまり，福沢は「文明とは結局人の智徳の進歩と云て可なり[20]」とし，智を積むを以て継続し発展してきた歴史を観た。(江戸時代を代表する朱子学的歴史観の書新井白石の『読史余論』は，徳を積むをもって継続し展開した歴史を把えた[21]。）松斎もまた智（「蘭学ヨリ発生セル新智識[22]」）をもって時世を把え，更に自らの作業の継続を後続の「好学の士」に托した*。

福沢は天変地異と歴史に関して次のように述べる。

> 野蛮を去ること遠からざる時代には‥‥内に存するものは唯恐怖と喜悦との心のみ。地震雷霆風雨水火皆恐れざる者なし。山を恐れ海を恐れ，旱魃を恐れ飢饉を恐れ，都て其時代の人智を以て制御すること能はざるものは，之を天災と称して唯恐怖するのみ‥‥人為の工夫を運さんとする者なし[23]。

「人為の工夫」=「智」による開（解）明への啓蒙を説く[24]，と共にそうした自然現象も「人事に於ても亦斯の如し」と社会現象と同様であると考えている。松斎と福沢との置かれた歴史的状況が量質ともに異る事は言うまでもないが，松斎がひそやかに行った『続日本王代一覧』の作業は，かかる次の時代の精神の前提を成したものであったと言い得るのではあるまいか。

小沢栄一博士が「格別のこともない」とされた『続日本王代一覧』には時代の息吹が看取されてならないのである。

(昭和55年9月16日　受理)

---

19) 拙著『鶴峯戊申の基礎的研究』134頁，桜楓社，昭48
20) 岩波文庫本，55頁
21) 拙著『日本近世思想の研究』所収「新井白石の描いた歴史像」32頁以下，法律文化社，1971
22) 藤田茂吉『文明東漸史』『明治文学全集 77』所収本，251頁，筑摩書房，昭40
23) 前掲，岩波文庫本，146頁～147頁
24) 文字通り天変地異に関して解明したのが，諭吉門下の小幡篤次郎の『天変地異』(慶応 4）であった。

* なお洋学者の歴史思想全体に関しては，別稿「洋学者の歴史観」—『季刊日本思想史 16』べりかん社，昭 56，2 に発表する予定である。